

文化財News速報

みあがり

町屋四丁目実揚遺跡、続々発見中！

荒川ふるさと
文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL03(3807)9234
登録(03)0049号



図2

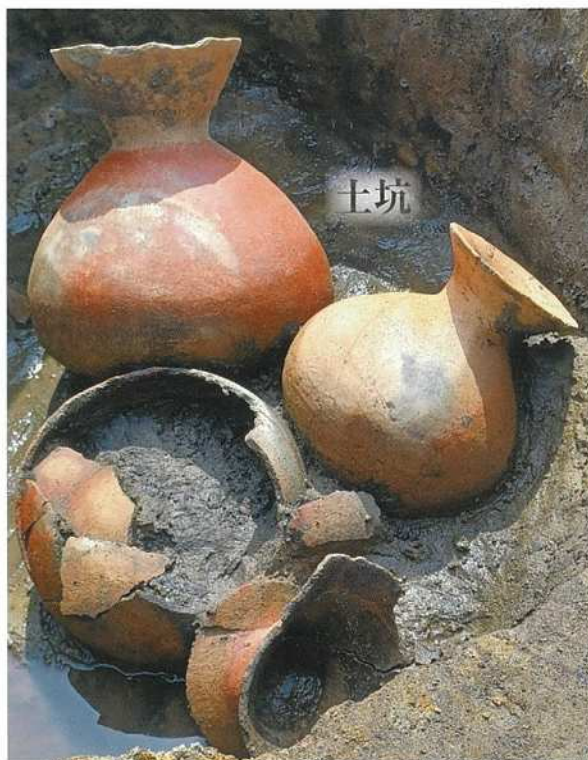


図1



図3



図4

町屋実揚遺跡調査続々 遺跡周辺は、隅田川に近い微高地上（低地より少し高い）に位置する。平成17年、A地点の本調査により、弥生時代終末頃～古墳時代前期に遡って、人びとの暮らしの跡が見つかった。開発事業の増加にともない調査の件数も増え、令和3年は、K・L・M地点の3ヶ所の本発掘調査が行われた。これらの調査では新たな発見があった。

弥生時代終末頃の壺 13回目となるM地点の本調査は、5月から約1ヶ月半、約150㎡の範囲で実施した。調査は南側からはじめ、当初は遺構の密度が高くないように見えたが、北側（隅田川側）に進むにつれ、遺構の数は増え、入り組んだ様子になっていった。そして、調査が大詰めを迎えた頃、完形の壺が、当時のままの姿で奇跡的に発見された（図1）。壺は、重なり合う2本の溝（図2）を切って、土坑と呼ばれる掘り込みを掘り進めている時に姿を現した。当遺跡から出土する土器は破片が多い中、貴重な事例となった。

出土した壺3点は、弥生時代終末頃の弥生土器で、高さ約30cmの一番大きな壺は、頸部から下が赤彩（せきさい）され、口縁には文様が施されている。また、別の壺には、胴部に穴（穿孔）が開けられていた。投げ込まれたというより、意識的に置いた状態に見えることも含め、何らかの祭祀と関連づけられると推測できる。

古代の出土品 この他、K地点では、古代の井戸跡から曲げ物や木枠の一部が確認された（図3）。他に、一部が欠けた石製帯飾具（図4）が出土した。帯に付けて使う装身具で、古代の役人が付けた持ち物である。

また、L地点では、古墳時代より少し新しい古代以降の人びとの跡が多く見つかった。周辺がどのような場所であったか、遺跡の様子が少しずつ明らかになりつつある。令和4年刊行予定の発掘調査報告書をお楽しみに。

〈八代和香子〉

収蔵庫のイッピン！ 上掲品目

使われた水害絵葉書

「館蔵展「絵葉書にみる近代あらかわ」

「いざればなし」

絵葉書というと、まず裏面の絵や写真が注目される。しかし絵葉書も郵便物である以上、表の宛名面に文章・消印がある、使用済みのもものも残っている。今回は、とある使用済み水害絵葉書から当時の状況を読み解いてみよう。

秋田へ伝えられた大洪水 まず表面から（図1）。消印は櫛形印、「秋田・大湯」「43・8・26」

「前015」とあり、明治43年（一九一〇）8月26日朝5時までに秋田県大湯の郵便局で引受けられている。また、欠けた消印から19日に何処かの郵便局を通過したとわかる。

宛名は「秋田県鹿角郡大湯村字扇平発電所安西宮殿」、字扇平発電所とは、現在の秋田県鹿

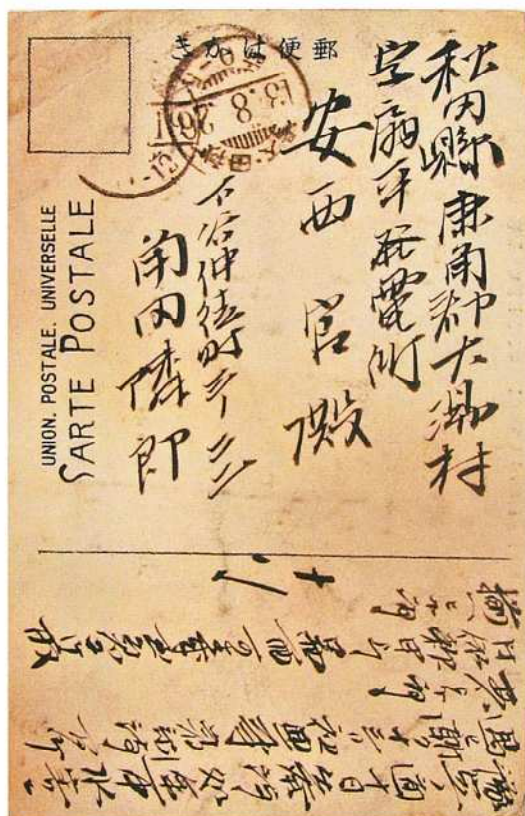


図1 表面（宛名面）



図2 裏面

角市十和田大湯の扇平第三発電所（明治39年運用開始の水力発電所）周辺と考えられる。差出人は「下谷仲徒町三一二 角田隣郎」で、赤倉硫黄鉱山（秋田県大館市にあった鉱山。明治35年試掘許可）の経営者、角田隣郎と同一人物と思われる。さて通知欄には、何と書かれているのだろうか（句読点は筆者）。

予定ノ通、十日出發致候処、途中水害ニ遇ヒ、漸ク十三日夜無事着參致候間、御安心被下度候
付、御依頼申上候図面可相成至急ニ御取揃へ被下度候
十八日

角田氏は商用で10日に出發したところ、途中で水害に遭遇。13日夜には到着した（場所は不明）のでご安心下さい、また、依頼した図面を至急お取り揃え下さいと伝えている。最後の「十八日」は文章を記した日付だから翌日の消印とつじつまが合う。

裏面（図2）は、「明治四十三年八月都下未曾有ノ大洪水 三ノ輪橋附近浸水ノ光景」で、角田氏は自分の住所、下谷仲徒町（現台東区上野三・五・六丁目）近くの絵葉書を選んだのかもしれない。水害の発生により足止めとなった角田氏がその様子を地方に伝えるには、水害絵葉書は非常にわかりやすい手段だったと言えそうだ。

水はいつ引いたのか ところで、実際の水害は何日頃減水したのか？ 『グラフィック 東京水害画報』9月1日号によれば、12日時点で「全部水中に没して、就中三輪町の如きは水深一丈二三尺（約80cm）」に及び、13日からは水勢が衰えるも減水せず、三ノ輪近隣の龍泉寺町は泥の海に腰まで没し、他町も床上床下浸水で、19日過ぎてても干上がらない場所もあったという。写真（図2）では、手前の人物のふともも近くまで水位は下がっており、当初80cm近くあった水は、撮影された時点で確かに引いている。角田氏は完全に水が引く前に東京を後にしたことになる。

水害絵葉書の流通 さて、8月15日の『東京朝日新聞』の「水害絵葉書の売行」には次のようにある。「今回の未曾有の大洪水の惨状を郷里知友等に報道せんとて水害写真絵葉書を買ふ人多く機敏に売出たる者は意外の利益を得たり」。発生5日後の15日には水害絵葉書はかなり販売されており、角田氏以外にもこれを買いたい求め、東京の水害の状況を知らせるべく、地方へ送った人が多かったことがうかがえる。使用済み水害絵葉書は、足止めから床上浸水まで、被災者たちの当時の困難を紙面を通して全国に、また現代に伝える存在といえるだろう。

〈高柳吟音〉

※ご教示いただきました鈴木努氏にお礼を申し上げます。



図1 協同会園遊会写真 (杉山誠氏蔵)

あるレファレンスから 先日、来館者の杉山さんから図1の写真を見せていただいた。杉山さんの祖父は千住製絨所に勤めており、関連する写真ではないかとのことだった。千住製絨所はラシャ場とも呼ばれ、毛織物等の製造をしていた工場だったが、この写真から工場らしさはどうも感じられない。一体何を写した写真なのだろうか？

写真の中の文字 そこで写真の中の文字情報から手掛かりを得ることにした。

まず目に入るのは、正面の仮設ゲートである。ゲートには「協同会萬歳」とあしらわれており、星マークが付いている。星マークは日本陸軍のマークであり、「S」は千住製絨所の「S」だろう。また、仮設ゲートの前の立札には「園遊会」とあり、合わせて考えると、「協同会」主催の園遊会の写真、ということができる。

では協同会とは何か？『千住製絨所五十年略史』によると、明治41年（一九〇八）に設立し、大正11年（一九二二）に購買会と改称、同13年4月、改組・改

古写真の中の歴史世界⑥ 千住製絨所古写真



図2 井上省三君之像

称して久母会になったという。したがって、この写真は一九〇八～二二年の間に撮られたことになる。協同会時代の事業として知られているのは託児所のみだが（『輝く奉仕者 近代社会事業功労者伝』『東京社会事業名鑑』）、久母会は福利厚生を担った先駆的な互助組織として知られている（『日本羅紗物語』）。写真には正面に二人のおめかしした女の子が写っているが、託児所に通う彼女らにカメラを向けたのかもしれない。

もう一つの井上省三像 さて、ゲートの右側に大きな人物が見える（図2）。やはり立札があり、「井上省三君之像」「経理科起毛部」と見える。経理課は千住製絨所内の係の一つであり、つまり係ごとにこうした出し物を出していたことがうかがえる。

井上省三は、いわずと知れた千住製絨所初代所長であり、明治19年に逝去した。スポーツセンター脇にある井上省三胸像が顕彰のため建てられたのは昭和11年（一九三六）のこと。写真の省三像は造り物なので、園遊会が終われば撤去される運命のはずではあるが、井上省三はこうして事あるごとに顕彰されていたようだ。（亀川泰照）

あらかわ
タイムトンネルズ31

シカゴ・コロンブス世界博覧会の表彰状

— 表彰された町の技術 — その1

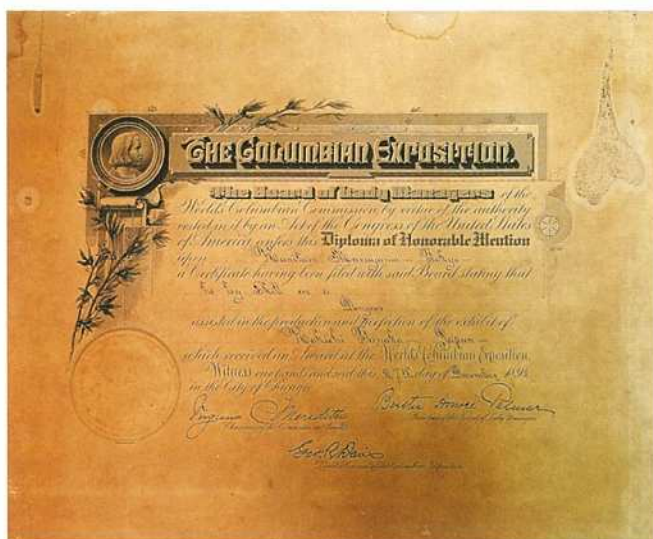


図1 賞状① 左下は入場券などの印刷を請け負った銀行関係の印刷会社ウエスタンバンクノート社のエンボス

伝えられた万博の賞状 今回ご紹介するのは丸山家（荒川地区）の2枚の賞状です。本資料は明治26年（一八九三）に米国イリノイ州シカゴ市で開催されたシカゴ・コロンブス世界博覧会に関するものです。2枚は原紙に貼られ大きな洋額へ額装され、かつては家の壁間にかけられて、大切にされていたそうです。東京都による江戸東京博物館設立の事前調査・歴史民俗資料所在調査（昭和58年（一九八三））によつて存在が確認され、『あらかわ文化財だより』1号でも報告しましたが、この度、当館への寄贈により、いろいろなことが分かってきました。

賞状①（図1） 大きさは縦36・8cm×横48・0cm。やや厚めの紙に印刷されています。上部の「THE

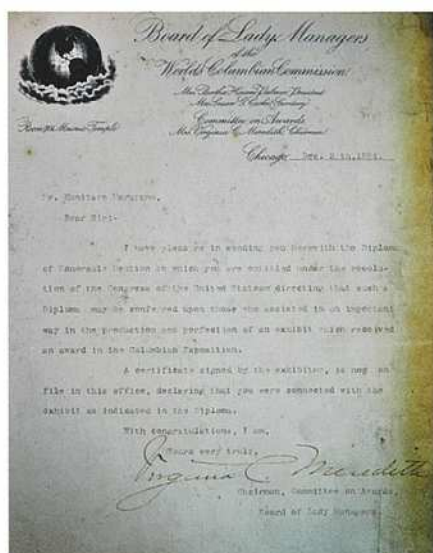


図2 賞状② マークの左下に沿って英語でシカゴ万博とある

COLUMBIAN EXPOSITION」のタイトルには「コロンブスの肖像画が添えられています。主文では、米国会衆国議会の法律に基づき当博覧会女性管理委員会が褒賞したデザイナー「タナカ コウキチ」の展示物の技術協力者である「マルヤマ クニタロウ」の功績を讃えています。日付は「27th day of December, 1894（明治27年12月27日）」。下部には贈呈者である同博覧会表彰委員会議長バージニア・クレイブル・メレデイス、同女性管理委員会会長バーサ・オノレ・パーマー、同局長ジョージ・R・デヴィスのサインがあります。

賞状②（図2） 大きさは縦26・9cm×横21・2cm。感熱紙を用いています。上部には女性管理委員会名等とシンボルマークが印字されています。下部のサインは同会議長メレデイスのもので、日付は「Dec. 27th, 1894（賞状①と同）」。受賞者は「マルヤマ クニタロウ」。主文には、米国議会の決議により同博覧会で受賞展示物の製作に協力したマルヤマ氏へ賞状を授与し、出品者の証明書通りに技術協力したことを証明する旨が記されています。では次に、表彰された二人と出品物について色々な角度から迫ってみましょう。

丸山音次郎と田中幸吉と「色革」 寄贈者によれば技術協力者は二代目の丸山音次郎（安政5年生）であり賞状の受賞者名は誤記でした。丸山家

の染革家業は、初代・丸山国次郎（天保7年生）が今の台東区金杉で染革商を営んだことに始まります。同じく寄贈された大福帳をめくると、現在地へ移転してくるのは大正末期であるとわかりました。戦前の丸山家は幕末の業界事情を知る数少ない古参の家で、『東京靴商工同業組合史』（昭和30年）でその仕事の興りなどを振り返っています。音次郎の回顧によれば、明治20年頃、近隣の工場から依頼されたことを契機にかばん用の牛・馬革の製造を始めました。そして、チャリ革（タンニンで鞣した薄い皮を揉んで柔らかくし、シボと呼ばれるシワを強調したもの）を作り、万博に出品したようです。

一方、『明治期万博博覧会美術品目録』をめくると「色革」を出品した東京府の「田中幸吉」が確認できます。田中は明治16年創業の田中製革所（現品川区戸越）の経営者で、主に軍靴を始めとする陸軍向けの皮革・皮具製造を担っていました。丸山家にも近い台東区橋場に分工場を持ち、その設備は「関東北にかけて第一等」（『皮革世界』第三年第一号）と評されています。

昭和40年代頃に両工場ともにその幕を下ろしており、当時の仔細を知るのは難しくなっています。したが、産業構造などから見て、田中製革所は製品製造を仕切り、丸山染革所へ下請け業務を外注する関係にあったと考えられます。また、立地からも日常的に仕事を共にしていた可能性も高いと思われます。

最新鋭の機械と技術をもち、多数の職人を抱えていた田中が、会社の顔となるような製品の製作に、社外の町の職人である音次郎を携わせたのは、腕を見込んでのことだったのでしょうか。

本資料からは、近代日本の工業発展を支えたしなやかな職人たちのネットワークと、その技術への信頼を垣間見ることができるとは思いますが、

〈岡田伊代〉

※本資料の寄贈、紙面での紹介にご協力いただいた丸山春美様に心よりお礼申し上げます。